

D.S.

Naomi Yamaguchi

山口なお美

G r a z i o s o

クラリネットオーケストラ

この作品はフィクションです。

実在する人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
すべて創作であり、

現実の出来事をモデルにしたものではありません。

二〇〇八年 八月

「——それでは結果発表に入りたいと思います」

からだのなかに内蔵されたバスドラムが、ゆつくりと、やがて連打し響き出す。わたしの全身を内側から揺さぶる低い音。ど、ど、ど。左胸に掌を当て、鎮まれ鎮まれと二度、口に出さず唱えてみた。

「全日本吹奏楽コンクール中国大会」と、大きく掲げられたステージに、横一列に並ぶ二十一年校四十二名の代表者達。どの顔もひどく青白く映るのは、煌々と照るライトのせいばかりではないだろう。

わっ、とどよめきが起こった。ひとつ目の学校がいきなり金を取ったのだ。隣に座るアルトサククス吹きの下瀬遥奈がこちらを見ないままに、指先だけを伸ばしてきた。肘掛けに置いたわたしの手をぎゅうっと握る。わたしよりもうんと華奢な手。指先は氷のように冷たい。

「怖いね」

「うん」

硬い顔で笑い合った。

わたし達修南高校吹奏楽部は十三番目の演奏だった。今、十番目の学校が金をもらった。

これで三つ目の金が出たことになる。今年はいくつ金が出るのだろう。十一番目銀。十二番目金。次だ――

「十三番。修南高等学校」

思わず息を詰め、耳を澄ます。

「――銀賞」

銀。

遥奈の指先の力が抜け、自分の手がすとんと膝上に落ちてきた。一瞬だけざわつく仲間達。ステージに立つ部長と副部長が、審査委員長から賞状を受け取り深々と頭を下げるのを、ゆるゆると力の抜けるからだで見守った。

そうか。銀かあ。

小さなため息が、ひとつこぼれた。

普門館への切符を手にいれることはできなかった。

――どうだった？

幼なじみの深沢健太からのメールに、

――銀だった。ピミヨウ。

とだけ打ち、返信した。

バスは山陽自動車道をひたすら西へと走っている。女子の多い吹奏楽部のバスの中は、コロ

ンやデオドラントや女子特有の甘ったるい匂いに満ちている。

課題曲だった、マーチ『晴天の風』が、ずっと頭のなかで鳴り響いていた。わたし達と同じ高校生が作曲した、すがすがしい、本当に頭上に青空がひらけているような行進曲だ。

金賞は全部で八つ出た。中国大会の代表に選出されたのはそのうちの三校だけ。吹奏楽の甲子園とうたわれている普門館への道のりは、決して平坦なものでも簡単なものでもない。それは吹奏楽をやっているものならば、誰でも知っていることだ。

「ここまで来られただけでも夢みたいなのに、銅じゃなく銀だって。すごくない？」

左斜め前方から、三年生の先輩達のはしゃぐ声が聞こえる。

「結構やればできるんだよね、わたし達も」

もっと前のほうからは、二年生の先輩達の声も。本気だろうか。バスの中はいたってなごやかな雰囲気だ。同じように明るく話せたらと思うのに。ついていけない。笑えない。石のように重くなった唇をきつく閉じ、目の前にある背凭れの、白いビニールシートを見つめる。

確かに。先輩達の言うとおり、中国大会のステージに立てたこと自体、奇跡だったのかもしれない。元々うちは、県大会さえ突破できないような、弱小吹奏楽部だったのだ。この四月。水嶋日名子先生が赴任して来るまでは。

隣に座る遥奈はずっと窓のほうを向いたままだ。さっきバスに乗る間際合わせた目は真っ赤だった。そういえば、あのおしゃべりミカりんできえ、今日は無口だ。前のシートに座っているはずなのに、全然声が聞こえてこない。

ふと後ろを向いてみた。斜め後ろで肘掛けに肘を突き顎に拳を当て眠るのは、同じ一年生の林那津だ。数少ない男子部員のうちのひとり。視線を感じたのか唐突に臉を開けた。一瞬だけ視線がぶつかる。大きくはないけれど意志のこもった強い瞳。どんな顔をしたらいいのかわからなくて固まっていると、林那津のほうは何でもなかったみたいで顔で再び臉を閉じた。素っ気ない態度。唇を尖らせ前を向く。

——あーや。

今よりずっと甲高い声の那津にそんな風に呼ばれていたなんて。ここにいる誰に言っても信じてはもらえないだろう。

バスが学校に戻るまで、あと一時間以上はかかる。眠ってしまおうか。シートにからだを預け、臉を閉じる。また。頭の中に『晴天の風』が流れ始めた。喉元と臉の裏が思いがけず熱くなる。やばい。泣けてきそうだ。みんなのいるところで、しかも今頃になって泣くなんて、かっこ悪過ぎる。

大丈夫。また来年がある。三年生は今日で部活を引退してしまふけれど、水嶋先生と、残りの部員みんながいっしょなら、次はきつと普門館を目指せるはずだ。

フルートを吹きたいな、と思った。リッププレートを最初に下唇に当てたときの、ひんやりとした感触がなんだか恋しい。

明日から、また練習だ。

二〇〇九年 二月

誰もいない放課後の音楽室は、海に沈んだ客船のように寂しい色を滲ませている。五線譜の入った黒板。古びたピアノ。寄り添い合うカッブルみたいにあふたつ並んだ譜面台。そうと指を伸ばし蛍光灯のスイッチに触れた。途端、眩しいくらいの光が落ち、青色に沈んでいた部屋がひと息に白く染まる。

おかしいな、と首を傾げる。どうしてまだ誰も来ていないのだろう。いつもなら、全員とはいわないまでも、何人かは集まっていたいい時間なのに。窓際に追いやられた古いオルガンの上にフルートケースと通学用の鞆を置き、柔らかなケースのなかから頑丈な箱を取り出した。窓の向こうの色が、ふいに暗くなる。顔を上げると、青紫に染まり始めた空と、遠く、工場の煙突で明滅する灯りが見えた。

静かだ。

今日、部活、休みだったりして。まさか。うちの部に休みなんてあるはずがない。平日は部活終了時刻まで、土日は朝九時から夕方五時までの通称「八時間練習」が当たり前の、すっかり年中無休という言葉が板についてしまったうちの部に。休みなんてあるはずがないのだ。それにしても、どうしてこんなに静かなんだろう。音楽室は古い校舎の四階の端にある。なんだ

かこの広い校舎にひとりきりになったみたいだ。そう考えると怖い。いや実際は、隣の隣は美術室だから美術部員がいるだろうし、一階には事務室もある。ポケットから携帯電話を取り出し開いてみた。着信もメールもなし。ピンク色のそれを閉じ、ポケットには入れないでフルートケースの横に置いた。

もしかしてとうとう部員がわたしひとりになっちゃった、とか？ フルートの頭部管を手に、ふふっと笑った。今日、体育の時間、顔を合わせた遥奈におかしなところはなかった。いつもとなんら変わらない顔で、バレンタインのチョコレートを誰が誰に渡したらしいといった情報を交換し合い、てれてれとバスケットボールをパスしたりゴールに放ったりして時間を潰した。あの顔が、すでに退部届けを出したあとだったというのなら、もう誰も信用できない。そう思う。灰色の枯れ木に縁取られたグラウンドからは、サッカー部とハンドボール部のやけに気合の入った声が聞こえる。組み立てたフルートを、着ているカーデイガンの左前身ごろでくるむように覆い、外を見る。健太はすぐに見つかった。紺地に太くオレンジの線の入ったジャージは彼のお気に入りだ。サッカー部員のなかで誰よりもチビなのが悩みだと言っていたけれど、他の部員と比べ特別背が低いという感じはしない。この一年の間に身長が伸びたのかもしれない。

フルートを抱えたまま、後ろの壁にスペースを取ってある吹奏楽部用の掲示板に近寄り、「一音入魂」と墨で恭しく書かれた半紙の下にある、新しく出来上がったばかりのスケジュール表に目をやった。トーンの薄い五線譜と音符からできた枠のなかに、これから秋までの予定

が書かれてあり、枠外のはじっこではサククスとコントラバスとト音記号とが踊っている。この可愛らしいスケジュール表は、新しく部長になった二年生の柏木先輩が作成したものだ。柏木部長は見かけも可憐だが中身も負けず劣らず愛らしい草食系男子クンなのだ。逆に副部長の土屋先輩だところはいいかない。土屋副部長は女子でありながら、どちらかというところやらちゃらしたものが、というか無駄なことが嫌いな性質だ。土屋副部長なら、きっともつと無機質なスケジュール表を作ることだろう。枠すらない文字だけのスケジュール表、とか。

— 今後の予定 —

二月二十一日・二十二日（仮） 課題曲試演選曲会

三月二十八日 定期演奏会

四月十日（仮） 新入生歓迎会

七月中旬～下旬 高校野球地区予選応援

八月四日～七日 合宿

八月八日 県大会

八月二十二日 中国大会

十月二十五日 全国大会

部は現在、三月末に行われる定期演奏会の練習の真っ只中にある。定期演奏会では主に、誰

もが聴き慣れたクラシック曲や映画音楽、デイズニーメドレー、Jポップなどを演奏する。一般の、普段吹奏楽に親しんでいない人達にも楽しめるようにという配慮からの選曲だ。一年生のわたし達にとっては、初めての定期演奏会となる。「一部と二部の間に観客を巻き込んだ余興をするから何かいいの考えといて」と、柏木部長から頼まれているのだけれど、遥奈とふたり、「観客を巻き込んだ余興っていう発想がそもそもわたした達にはないよね」と感心するだけで、まだ全くアイデアは浮かんでいないような状態だ。

そんななか、先週末、二〇〇九年度の吹奏楽コンクールの課題曲が発表された。その課題曲の楽譜が届いたと連絡メールが回ってきたのはお昼休みのもので、今日の部活は楽譜の配布とCD鑑賞だと記されていた。もうそろそろ誰か来てもいい頃なのに。そう思い時計を見る。やっぱ遅い。

少しあたたまったフルートを懐から取り出し、歌口から軽く息を吹き込む。繊細な管楽器は温度差が嫌いだ。寒くて冷たくなっているところへ思い切り熱い息を吹き込まれると、拗ねてしまう。壊れてしまうことだってまれにある。そうっと、調子はどうですかと話しかけるみたいに息を吹き込む。そんな風に丁寧にあつかってあげなければいけない。

かちゃっ、と。背中側から扉の開く音が聞こえた。ようやく誰か来たみたいだ。思わず笑顔になって振り向いた。

ひよろひよろと背ばかり高い影。前ボタンを半分留めただけの着崩した学ラン。現れたのは林那津だった。

顔が、一瞬にして凍りつく。

向こうも少なからず驚いたようで、細い目が、わたしの姿を捉えた瞬間大きく開かれた。でも、それだけ。すぐにむすっとした顔になると、手にしていた鞆をオルガンの上に放り、鞆からによっきり生えたベージュのスティック二本を取り出し、弄り始めた。

ひとりきりではなくなったというのに逆に静けさが増した気がした。ごくんと息を呑む音さえ耳に響く。那津が現れたというただそれだけのことで、わたしの声帯はどこかへ隠れてしまったみたいだ。他の部員、たとえば同じ一年生の遥奈やミカりんや、部長の柏木先輩が相手なら、いくらでもおしゃべりすることができるのに。フルートを置き、準備室の扉を開けた。みんなが来る前に椅子を並べておこうと思った。

両脇にふたつずつ、折り畳み式のパイプ椅子を計四つ抱えもたもた歩いていると、かたんと音がして、視界に大きな上履きが入り込んできた。踵を踏み潰され、スリッパみたいな形になった上履き。それが音楽室と準備室との境を跨ぐ。油性マジックで書かれた「A林」の文字は、少し色が掠れている。

ごつい両手が目の前に差し出され、心臓が思い切りよく飛び跳ねた。もしかしたらからだも。「ふたつずつ運べば？ どうせそんな人数いないんだし」

こちらから軽々と四つの椅子を奪い、言う。

あまりの距離の近さに声が出なかった。代わりに大きくうなずいて見せた。黒い背中が準備室から消えたところで呼吸が止まっていることに気づき慌てて深呼吸を繰り返した。なんだっ

てこんな、息もできないほど緊張しているのだろう。那津相手に。ばかみたいだ。

——どうせそんな人数いないんだし。

そう。吹奏楽部員は現在十七人しかいない。吹奏楽部員の為に用意された楽器を保管しておく棚は、秋からずっと、虫食いのような隙間をあちこち空けている。コントラバスのケースにうつすら積もった白い埃。濃紺のカバーに包まれ密やかに眠るハーブ。吹奏楽部の創立年数は古く、活発だった年も過去には何度かあったようで、楽器だけは揃っている。けれど今の人数では全てを使いこなすことなどできない。そちらは敢えて見ないようにして、今度はひとつずつパイプ椅子を脇に抱え、準備室と音楽室との間を行ったり来たりした。

三年生が引退したあと、二年生部員の大半が部活に姿を見せなくなった。退部届けを出したと聞かされ驚いたのは九月に入ってからのこと、中国大会で銀を取っただけでは満足できず、来年こそは全国大会へ行こう、これまで以上に練習に心血注ごうと、勝手にはりきっていた矢先のことだった。つられるように残りの二年生と、一年生部員も数人やめていった。やめていく人達と、残った部員とで、話し合いといおうかぶつかり合いといおうか、一悶着あったのも、すでに遠い昔の出来事になってしまっている。やめていった人達のことを、今はもう誰も口にしない。

そういうえば、と、目の前にある真つ黒な制服の背中を見つめた。あの、互いの気持ちだけを押しつけ合う醜い空気の中、那津だけは我関せずな顔で、音楽室の隅に座りこみ、黙々とスネアの皮を張り替えていた。あんなのいつだってできるのに。パーカッション担当でもうひと

り残った幸田さんが、恨めしそうな顔でグチっていたのをよく覚えている。

全部椅子を並べ終えてもまだ誰も来ない。再び異様な静寂に包まれる。わたしは手持ち無沙汰にフルートに触れ、那津はステイックを手馴れた動作でぐるぐる回しながら遠くを見ている。何を見ているのだろうか。視線の先を辿ったけれど、夕陽の落ちかけた空なのか、砂埃の舞うグラウンドなのか、或いは幼なじみの健太を見ているのか、よくわからなかった。那津は中学二年の夏休みまで、健太といっしょにサッカーボールを追っていた。あの白と黒のボールを恋しく思う気持ち、今もちよつとくらいは持っているのかもしれない。

急激に空腹を覚えた。ぐぐぐうーと。何か特殊な動物でも飼っているんじゃないかと疑うような大きな音が自分のお腹から聞こえてきてぎよつとした。普段は無関心な那津が、え、という目でこちらを見る。どうしてよりよってこんなときに。しかもいかにもお腹が空きましたと言わんばかりのいやしい音。顔が瞬時に熱を帯びる。再びぐぐうーと派手な音がしたけれど、今度は地を這うような震動音がかぶさり、助かった。マナーモードにしていた携帯電話がフルートケースの横で震えている。慌てて走り寄り開く。送信者名は「橋本美華」。ミカリんだ。人工的なベル音が後ろから聞こえ、思わず振り返った。那津が面倒くさそうな顔でポケットを探っている。ふたりの電話が同時に鳴るなんて、変だ。誰も来ない音楽室。いやな予感がした。

題名…急げ！

大きく目を見開いた。

本文・何やってるの？ もしや音楽室にいる？ みんな視聴覚室に集まってるよ。能面ヒナ
コとつっちーの頭にツノが見える！

「げっ。うっそ」
ふたり同時に声をあげた。

真新しい楽譜を手にしたときの、幼い子供みたいにわくわくと胸躍る感じを、どう表現したらいいのだろう。

青白い用紙に黒くくつきり浮きでる五線譜とその上を滑るように踊るまだ見慣れない音符達。この音符はどんな音色をわたし達に与えてくれるのだろう。わたし達はこの音符から、半年後、どんな音楽を作り出しているのだろう。

早く吹いてみたい。みんなで演奏してみたい。そう思う。

二〇〇九年度の課題曲は全部で五曲あった。

課題曲

I 『16世紀のシャンソンによる変奏曲』

II 『コミカル★パレード』

III 『ネストリアン・モニュメント』

IV 『マーチ「青空と太陽」』

V 『躍動する魂 吹奏楽のための』

「何、この星マーク」

しんとした空気のなか、ミカリンがよく透る声で反応した。課題曲IIの、『コミカル★パレード』のことを言っているみたいだった。みんなから遅れて視聴覚室に入ったわたしは後ろから三列目の遥奈の横に座っている。その隣にはミカリンが。そしてその横には那津が、ドアに一番近い席に、長い脚を組み座っていた。

「これってさー。曲名書く度にこの星マークをコミカルとパレードの間に入れたいじゃないわけ？ 黒塗り星マークだよ。チョーめんどくさくない？ っていうか、きらりん☆レボリューション？ アニメじゃないんだからねー」

ねーのあとにきゃはははと笑う。誰もが思っても口に出せない、というかわざわざ出さないことを、ミカリンは何も考えずに次から次へとその愛らしいピンク色の唇から溢れさせる。今日は水嶋日名子先生もいるというのに。勇気がある。近くにいるこちらのほうがひやひやする。

「もう、ミカリン。ちょっとくらい静かにできないの？」

声を潜め言うわたしに、ミカリンは、はーいと大きな声で返事をし、口にチャックをする仕事をしながら見せた。ふざけてる！

水嶋先生は、わたし達より列をひとつ空けた一番後ろの席にぼつんとひとりで座っている。

ミカリんの声に笑うことも顔を顰めることもなく、聞こえていないみたいで、ただ無表情に司会のふたりを見遣っている。

能面ヒナコ。心のなかでそつと呟く。長身のスレンダーなからだに大きな目と秀でた額、高い鼻梁を持つうつくしい顔。肩胛骨まであるストレートの髪は黒く艶やかだ。ひと目見ただけではっと息を呑むほどのうつくしさを持っていないながら、けれどその美麗な顔が感情を見せることはあまりない。怒るときも瞳の光だけで怒りを露にし、笑う顔なんて、前にいつ見たのか思いつけないほど、喜怒哀楽を表に出さない人だ。部のみんなが顧問のことを、能面ヒナコと呼ぶようになったのは、だから自然な流れだった。もちろん本人の前では口が裂けても言わないけれど。吹奏楽部にはもうひとり、能面ヒナコとは対照的にふわふわと甘い綿菓子みたいな印象の女性教師、園田先生が副顧問として在籍している。こちらは育児休業から復帰したばかりということもあってあまり部活に顔を見せることはなかった。名ばかり顧問の園田です、と本人が冗談めかして言うくらい、滅多にお目にかかれない存在なのだ。

「ね、林もそう思わないー？」

ミカリんが那津に話しかけている。

「は？」

あからさまに鬱陶しそうな那津の声に、わたしは顔を上げそちらを見た。

「この★マークだよ。林もアニメっぽいって思うでしょ？ ね？」

「知らねーよ」

「えー、何、その温度の低い反応は。おお斬新、とか思ったりしないのー？」

「橋本うるさい、とかは思うよな」

那津がわざとらしくミカリんのいるほうの耳を塞ぎ、ミカリんがその背中をばしりと叩く。堪えきれなくなった笑いがそこかしこから聞こえ始めた。

「橋本ー。お前の頭のなかにもお星様がきらきら輝いてるぞー」

一番前の席から茶々を入れるのは、三人いる男子部員のうちのひとり、ユーフォニアム吹きの小金丸だ。特徴的な丸いからだに坊主頭の彼は、

「うるさい、スモウベヤ」

そう。相撲部屋と呼ばれている。こちらは能面ヒナコと違い、本人の前でも平気で呼んでいることになっている。というか勝手に呼ぶ。

「橋本さん、静かにしてください」

司会の土屋副部長が眼鏡のつるに触れ、睨みをきかせた目つきで言った。能面ヒナコに負けず劣らず、伶俐な表情には迫力がある。

「これから全曲試聴します。楽譜、全部ありますか？ 足りない人、いませんか？」

全部ありまーす、と明るい返事。これもミカリんだ。校則違反のパーマをかけた髪が跳ねる横で、那津の肩がくつと笑う感じに揺れるのが見えた。

「土曜日の午前中にパート練習、午後から全員で合わせます。日曜日にはどの曲でいくのかを話し合って決めたいと思いますのでそのつもりで。各自、譜読みはしておいてください」

土屋副部長が話を終え、柏木部長がCDをセットする。

中学生のときは、課題曲も自由曲も顧問の先生が決めるのが当たり前になっていた、わたし達部員が口を挟むことはほとんどなかった。高校生になるとこんな風に一から曲決めに携われるのだ。

ざわついていた視聴覚室にすっと静けさが入り込んできた。示し合わせたみたいに、誰もが瞬時に耳を澄ませる。

静寂を破ったのは柔らかなオーボエの響きだった。低く切ない短調の流れ。他にもクラリネットやバリトンサクスが、ひそやかにさりげなくオーボエの作り出すうつくしい旋律を支えている。

「大人っぽくてかっこいい曲だね」

隣の遥奈がそっと耳打ちしてきた。めずらしく上擦った声。

「うん。いいね、この曲」

ああ。とうとうきた。とうとう今年もコンクールが始まった、と思った。耳から入ってくるせつない響きと相俟って、気持ち怖いくらい高ぶってくる。背筋がぴんと伸びる思いがした。

楽譜を鞆に入れ、席を立つ。まだ少し興奮している。

課題曲は二回通して聴いた。個人的に気に入ったのは、最初に聴いた『16世紀のシャンソンによる変奏曲』だけれど、『コミカル★パレード』と『青空と太陽』のマーチ二曲も捨てがた

い、と思う。

放送機器の傍では柏木部長と土屋副部長のふたりが難しい顔で話し込んでいる。身長が百六十センチに満たないほど小柄で、学ランを着ていなければ女子生徒に間違えられそうなお愛らしい顔立ちのホルン吹き、柏木先輩と、百七センチを超えるすらりとした長身を無理矢理濃紺のセーラー服に押し込んだ、銀縁眼鏡の似合ういかにも秀才然としたクラリネット吹きの土屋先輩。通称つっちー（これも能面ヒナコ同様本人の前では死んでも口にしないうことになっている）。柏木部長が何か面白いことでも口にしたのだろう、眉間に皺を寄せていた土屋副部長の顔がぱっとほころんだ。穏やかな柏木部長と話をすると、誰もがあんな表情を見せる。柏木マジック。二年生でただふたり部に残った彼らにとっては高校生活最後のコンクールになるんだな、とふと思った。あのふたりは、いったいどの曲を選ぶつもりでいるのだろう。曲も、聴いただけではわからない、演奏してみると、とんでもなく印象が変わるといのはよく聞く話だ。水嶋先生は、うちのカラーに合った曲を、と曲選びの度に口にする。わたし達に合った曲。口のなかで呟いてみても、それがどんな曲であるのかイマイチぴんとこなかった。だから、試しに演奏してみるのか、とようやく気づく。

「帰ろう、あや」

遥奈に肩をぽんと叩かれた。

「あ。うん」

「じゃ、ねー、柴崎さん。また明日」

明るく声をかけてきた同じフルート担当の春日井さんに、

「うん。明日ね」

と手を振った。

壁に掛かる丸い時計は六時二十分を示している。部活終了時刻より十分も早く吹奏楽部の活動が終わるなんてめずらしい。紺色の鞆かぼんを肩に掛け、何か足りないな、とあたりを見回す。

「あれ？ ミカリんは？」

さっきまであんなにガンガン喋しゃべっていた友人の声が聞こえてこない。姿も見えない。ミーティングの場所が音楽室から視聴覚室へ変更されたことをわたしに連絡し忘れたのは、メールを送ってきた当のミカリんだった。さては逃げたな。

「ミカリん、テニス部の部室に行くって言ってたよ」

バーバリー柄のマフラーを首に巻きながら、何でもないような顔で遥奈が言った。

「テニス部？ どうしてテニス部？」

「バレンタインにさ、ミカリん、テニス部の友森くんにチョコあげたって言ってたでしょ？ 今日、いっしょに帰る約束してるんだって」

「え。マジで？」

ふたりで階段を降りる。遥奈は小柄だ。さほど背の高くないわたしの目線で遥奈の頭が揺れている。外はすっかり陽が落ちたらしく、廊下も階段も白い灯りに照らされていた。

「なに、それってつき合ってるってこと？」

「まだはつきりつき合いうって話にはなっていないみたいだけど。でもそうなるんじゃないのかな？」

「えー」

思わず大きな声が出た。わたし達三人のうちの誰かにそういった相手ができるなんて。びっくりだ。

部活後の下校は遥奈とミカリんといっしょになることが多い。それに時折健太や他のサッカー部員が混じることがあるくらい。三人ともクラスが別々なのに、一年いっしょの部にいるうちに、自然と仲良くなった。

「へえー。ミカリんにねえ。カレシがねえ」

ついぶつぶつとひとりごちる。先を越されて悔しいような、自分にとってカレシという存在はまだそれほど必要なものでもないのど別にどうということもないような。複雑な心境だ。わたしはちらりと遥奈の横顔に視線を送った。確か遥奈もバレンタインにはチョコレットをあげたはず。義理でも友でもない本気のチョコレット。だけど相手はそう捉とらえてくれなかったと、全くの義理チョコと思われたみたいだと、嘆なげいていたっけ。相手は背の高い坊主頭の、遥奈と同じクラスの野球部員だ。

「何？」

じっと見つめていたからだろう、遥奈がいぶかしげな顔をする。わたしは何でもない、と首を振った。

「ねえ、あや」

「うん」

「大丈夫、かな？」

「何が？ ミカリん？」

「違うよ」

遥奈がむつと唇を尖らせた。

「ミカリんの心配なんかするわけじゃないじゃん。あのコ、ちゃらけて見えるけど、実はあたしからよりよっぽどしつかりしてるんだから。誰とつき合おうと全然心配なんかいららないよ」

部の話に決まってる。

そう言われ、ああ、うんそれね、とうなずいた。

「いまの人数で、あの課題曲をちゃんと仕上げられると、あやは思う？」

遥奈の不安はよくわかった。遥奈が持っているのと同じ不安を、わたしもずっと抱えているから。

わたし達が参加する全日本吹奏楽コンクールのA部門には、参加上限人数に五十五人（昨年までは五十人だった）という決まりがある。反対に下限人数に制限はなく、十七人でもエントリーすること、それ自体は可能なのだ。ただし、迫力が勝負の吹奏楽で、十七人の合奏ではあまりにも心許なさ過ぎる。たった十七人で、五十五人の団体に太刀打ちできるとも思えない。

部員数に関係なく参加できるよう、他にも部門が用意されているのだけれど、全国大会――

普門館への道がひらけているのは、A部門だけなのだ。

出るなら絶対A部門！ けれど部員数が少な過ぎる――

秋からずつと、おそらくは、部員全員が抱えている不安。でも、誰もそれを明確に口にしたことはない。口にしたら負け、とも思っているのか、そのことには一切触れることなくここまできた。

昇降口に出ると、空気が一瞬で冷たくなった。吐く息がたちまち白く染まる。昇降口の、靴箱が並ぶ側とは反対にある花壇には、シクラメンの鉢植えがいくつも並べられていて、夜の帳の下りるなか、白い花だけが点々と淡く浮かびあがっていた。

――勉強や遊びを犠牲にまでして、どうしてコンクールで上を目指さなくちゃいけないの？ やめていく先輩の言葉に、咄嗟に答えることができなかった。わたしも。他の部員も。誰ひとりとして。

「遥奈はコンクール、出ないほうがいいと思ってる？」

「まさか」

小さな頭がぶんぶんと横に揺れた。

「思っていないよ、そんなこと」

この友人は小さなからだに似合わず案外負けん気が強い。あやはどうなの？ と訊ねられ、「わたしも出たい」

きっぱりと答えた。

去年の夏。わたしはあの中国大会で、何か大切なものを掴みかけた、と感じていた。それが何であつたのか、はっきりとはわからない。自分のなかにそれまでは存在しなかつた手応えのようなもの。金きんがとれそうだとか、全国大会へいけそうだとか、そういう即物的なものとは違う何かもつと感覚的なものだった。おそらくはコンクールに参加しなければ、ひとつの目標にストイックに、或いは真摯しんしに向かわなければ、決して得ることのできないものなのだろうと思ふ。

「新入部員次第だよ、きつと。たくさん入ってくれるといいね」

「そうだね」

と、遥奈もうなづく。

「でもね、あや」

「うん」

「あたし、仮に新入部員がひとりも入らなかつたとしても、いまのままの十七人でも、それでもやっぱり挑戦したいと思つてるんだ。甘いかもしれないけど……」

わたしは甘いとも甘くないとも言わず、遥奈の次の言葉を待った。

「水嶋先生の指導は確かに厳しいけど、自分が、っていうか、自分達がこう、ぐんぐん伸びていくのが、毎日目に見えるみたいにわかるんだよね。それって、すごいことだと思ふの。高校生だから勉強とか遊びのほうが大切っていうのも、まあありかなとは思ふよ。でもね、部活もいましかできないじゃん？」

ああ。それ、わたしもずっとそう思つてた。いっしょだよ。言いたかつたけれど、言葉にすると実際より軽く伝わってしまう気がして、わたしはただうなづくだけにした。

旧校舎のある向かい側から、ひよろ長い人影が現れた。目を凝らしそれが誰であるかを認識した途端とたん、わたしは足を止め、あつ、と声をあげた。

パイプ椅子を片づけるのをすっかり忘れていた！

ミカリンからメールが来たあと、慌てて音楽室を飛び出したのだ。出しっぱなしの椅子を気にするわたしに、ミーティングが終わってから片づけに来ればいいんじゃないの。軽い感じで那津が言い、うん、そうだねそうしよう、と返したのに。課題曲を聴いた興奮にすっかりそんな約束は、忘却の、はるかかなたに吹き飛んでしまっていた。

那津はちらっと視線を合わせたけれど何も言わない。笑うことも怒ることもせず、靴箱に手を伸ばし、白いナイキのスニーカーを取り出してはいる。

「……ご、ごめん」

こわごわ近寄り声をかけた。

「いいよ、別に」

冷たい声。そんな素っ気無く返すくらいならちゃんと怒ればいいのに、と思つた。どうすればいいのかわからなくて、叱しかられた犬が飼い主の次の言葉を待つようにおとなしく、靴を履き替える姿を眺めていると、

「ああ、そうだ」

スニーカーを履き終えた那津が、脇に抱えた鞆かまきに手をつ込みごそごそし始めた。

「これやる」

ほら、と差し出されたのは近くのコンビニで売っている、焼きたて直送がうたい文句のメロンパンだった。

「食え」

「は？」

なんで？ どうしてメロンパン？ 反射的に手を出し受け取ったそれを、目を瞬しんぱき見つめる。クッキー生地にグラニュー糖がたっぷりまぶされたポリウムのあるパンだ。カロリー高そうだな、なんてことをちらりと思う。

「腹減ってんだろ？ さっきすっげえど派手な音、させてたじゃん」
ど派手な音。

「本当は部活が始まる前にひとりでこっそり食おうと思ってただけだよ。誰かさんがお腹ぐーぐー鳴らしてる横で、とてもじゃないけど食えないよな。持って帰っても仕方ないからやるよ」

「……」

「共食い、な？」

にと笑うと背を向け行ってしまった。何を笑われたのか、よくわからなかった。

「共食いだって」

後ろから手元を覗のぞき込んだ遥奈が、メロンパンとわたしの顔を見比べおかしそうに笑う。メロンパンは誰かさんの顔とよく似た、丸い形をしていた。

♪♪♪

画面に現れるGAME OVERの文字。ドーンと、響く重低音。

「うわー。まただよ」

手にしていたコントローラーを放り投げると、フローリングの床の上、仰向けあおむに寝転がった。

「全然、ダメ。全然、進まない」

「残念、あや」

読んでいたコミックスから顔を上げ、健太が笑う。

見慣れた白いクロス張りの天井に丸く平べったい蛍光灯けいこうとうが映る。あれ？ と一瞬妙な違和感を覚え、すぐにそれが何であるのか気がついた。以前はあの蛍光灯けいこうとうの横に、オレンジ色の船が数隻浮かんでいたはずだ。深沢のおばさんのお気に入りだった船のモビルは、いつの間にかこの部屋から姿を消している。前来たときはあったっけ？ いつまで飾られていたのか思い出そうとしたけれど、全く記憶に残っていなかった。

「持って帰ってする？」

優しく問う健太の声に、わたしは首を横に振った。

「いい。時間ないし」

「これ、そんな時間かかんないよ。すぐに終わる」

わたしはもう一度首を振った。板に擦れる後頭部がごりごりと痛い。

「家にいるときくらい勉強しなさいって、お母さん、うるさいんだよ。ゲームなんかしてたらもう、タ、イ、へ、ン。鬼ばばあになっちゃう」

「鬼ばばあ？ あのおばさんが？」

「あの」と「おばさん」の間に「優しい」という形容詞が隠れているのだとしたら、健太はうちの母の本当の怖さを知らないな、と思う。

「仕方ないんだけどね。一学期も二学期も、成績マジで悲惨だったから。部活、やめなさいって言われないだけまだマシ」

二学期の通知表を見た際の、母の青褪めた顔と眼光鋭い瞳を思い出すとぞつとする。氷のように冷たい声で、わたしの勉強に対する意欲の低さを、ときに遠回しにときに直截に、延々と批判した。

「吹奏楽部は大変だもんな。おれらよりよっぽど練習時間多いじゃん」

くすつと笑う声。リセットボタンを押す音。階下から微かにピアノの音が聞こえてくる。誰も弾く人のいないピアノが可哀相だからと、深沢のおじさんは昔わたし達が行っていたのと同じ近所のピアノ教室に一年前から通い始めた。仕事が忙しくてほとんど練習できないと笑っていたおじさんの弾いている曲は、だから今もバイエルだ。バイエルの、あれは六十番くらいだ

ろうか。

「おじさん、いるんだね」

「うん。今日はめずらしく残業がなかったみたい。——もう一回、する？」

「ううん。もしいい」

「つづき、やっていい？」

「いいよ」

さつきから何度も聴いている音楽がまた流れ出す。コンピューターで作られた人工的な音。こういうゲームの主題歌を管楽器で奏でるのもいいな、と思った。もしうちの部で演奏するとしたら、誰がどのメロディを担当するのがいいだろう。ついそんなことに頭を働かせてしまうのは、定演の曲を、今いる人数だけで何とか演奏しようと、みんなであれこれアレンジしたからだ。自分達用に編曲するのがすっかり癖になってしまっている。テレビから流れるコマーションソングを聴いたときも。帰り道のガソリンスタンドから流れてくるFMラジオのリクエスト曲を耳にしたときも。

最初の優しい旋律は木管楽器がいいかもしれない。いや違うな。トランペットだ。高音部を高らかに、そして繊細に響かせるミカリんのソロ。土屋副部長のクラリネットがそれを引き継ぎ、他の金管と木管とが小さく重なり合っていく。こういう静かな音楽だとパーカッションの出番はほとんどない。最後のほうに少しだけ登場させよう。シンバルを手に、自分の出を待つ那津の姿が自然と浮かぶ。怒っているようにも見える真剣な顔に、今日、帰り際見せたいはず

らっばい笑顔が重なる。笑うと左頬骨の上に見える一センチ程度のいじわるえくぼ。あれを間近に見たのも、本当に久しぶりのことだった。

「あのね、健太」

「うん」

気のない返事。意識はもうここにはないのだ。テレビ画面の向こうの世界に入り込んでしまっている。

「今日、久しぶりに那津と話をしたよ」

「……」

「二年ぶり、くらいかな」

「二年ぶりって」

健太はわたしが冗談を言ったと思ったらしく、笑っただけで、こちらを見ることも何かを訊ねることもしなかった。あぐらをかいた姿勢でテレビ画面に向かう背中が、少しだけ丸くなっている。

白い天井を眺めながら、昔は健太と那津とわたしの三人でよくこの部屋で遊んだな、と思った。何が楽しいのか、三人で飽くことなく、雨の日なんかは一日中いっしょに過ごしたこともあった。天井からぶら下がった船をただ見上げたり、机の上からジャンプして船に手が届くかどうか汗まみれになって挑戦したり。今となってはどうということもないことが、とても特別なことに思えていた。子供だったのだ。わたし達三人とも。とても幼かった。

「帰るね」

からだを起こし言った。

「え？ もう？」

「うん。宿題やらないと」

健太はコントローラーを置くと、わたしといっしょに立ち上がった。頭の位置が、前より少し上にある。やっぱり身長が伸びたみたいだと思う。

「チョコレート、ありがとな」

「たくさん入ってるから、おばさん達といっしょに食べてね」

数日遅れのバレンタインになってしまった。健太の塾があったり、わたしの部活が長引いたり。なかなか時間が合わなくて、ずっと持つて来ることができなかったのだ。

「うん」

健太はにっこりと、上品な感じに微笑んだ。顎の尖った逆三角形の小さな顔。くつきりとした二重瞼の大きな目。笑うと長い睫がいっそう目立つ。健太は誰からも愛される子猫のように魅力的で甘えん坊な顔立ちをしている。

「あや」

部屋の扉を開けたわたしを健太が呼び止めた。

「なに？」

振り返って見た健太の顔は逆光になっていて、表情がよくわからなかった。けれど、健太の

後ろにある机の上の、薄い水色の包みは、はっきりと目にする事ができた。控えめに、それとなく存在を主張する、いかにもプレゼント然とした包み。あれはきつとバレンタインのチョコレートの抜け殻だ。ロゴの入っていない包装紙の中身は手作りだったはず。遥奈とミカりんからの情報で、あれが誰からのものなのか、その女子がどれほど健太に夢中なのかをわたしはすでに知っていた。つき合うの？ 訊くことは簡単なのに、訊けなかった。健太はやや間を置いて、

「新入部員。たくさん入るといいな」

そんなことを言った。わたしは、そうだねとうなずき階段を降りた。

♪♪♪

三月の終わり。近所の公園の桜の木にぼつぼつと薄桃色の膨らみが見え始めた頃。市の小さなホールで修南高校吹奏楽部の定期演奏会が行われた。

「あー。やだやだやだ。緊張する」

緊張すると唇に変な力が入る、息が短くなって困る、ソロがあるのに失敗したらどうしよう、としきりからだを揺らし喋りまくるミカりんの膝を、隣に座る遥奈の手がぴしゃりと叩いた。「もう、やめてよ。そういうのって伝染するんだからね。こっちまでどきどきしてきちゃったじゃないのよ」

「だってえん」

「うわっ、きもっ、何、その甘えた声。いいからあと五分くらいその口開かないで。黙ってて。いい？ わかった？」

橋本美華に向かって五分も黙れだなんて。下瀬遥奈も相当酷だな、大人しそうな顔して実は鬼だな、とそこにいる誰もが思ったに違いない。一瞬楽屋全体がしんとなった。遥奈も本番前で神経質になっているのだろう。コンクールとは違うんだから気楽にいきましょうと、ここへ来る前柏木部長は言ったけれど、なかなかそうもいかないのが実情だ。

「ミカりんが喋らないと、ほんつと静かだね」

しみじみ言うわたしの台詞にみんなが笑い、ミカりんもへらつと間の抜けた笑顔を見せた。どこかで金管楽器の音が響いている。心臓を足元から震わせる低い音。チューバだ。まだ建物の外で音出しをしている部員もいるようだった。

「そろそろ行こうか」

立ち上がり、言った。開演十五分前。十分前に舞台袖に集合となっているけれど、ここにも落ち着かない。

「外でもう一回音出ししてくる」

ミカりんがトランペットを抱え、ばたばたと出て行く。

「地に足ついてないなあ、ミカりんは」

呆れ顔で言うわたしに、

「いっつも、あんなじゃない。始まるまでそわそわしてゐるくせに、いざ吹き始めると堂々といひ音出すんだから。周りにいるほうはたまらないよね」

褒めていゝのかけなしているのかわからない口調で遥奈が言い、

「そうだよ。橋本さんって、ペット吹いてるときと、そうじゃないときって、まるで別人だよね」

春日井さんが控えめな声で同意した。いつもはふたつに分けただけで垂らしている前髪を、今日はきちんとピンで留めている。春日井さんのおでこは白くて広い。

「可愛いね」

額に触れようと、恥ずかしそうに笑った。

舞台袖にはすでにパーカッション担当のふたりと小金丸が来ていた。音響設備の傍で司会進行役の放送部員と打ち合わせをしているのは柏木部長と土屋副部長だ。水嶋先生の姿はまだ見えない。

袖幕から客席を覗く。客の入りは半分程度、といったところだろうか。

「あれ。たったあれだけ」

耳のすぐ傍で気の抜けたような声がして振り返ると、ミカりんがわたしと遥奈の間から顔だけをひよいっと覗かせていた。

「ミカりん、いつの間に。外に行ったんじゃないの？」

「つていうかさー、あんなに緊張する緊張するって言ってた人が、たったあれだけって、何よ。

お客さん少ないほうが気楽でいいでしょ」

「えー。少ないと張り合ってもんがないじゃん」

「なーに言ってるんだか」

「まだ増えるんじゃないの？ チケット全部捌けたって、部長、言ってたし」

わたしは言い、もう一度客席に目を走らせる。下手側は幕の陰になって見えにくいけれど、上手側はよく見える。前列の端っこのほうに、うちの弟と両親、それに深沢のおぼさんが並んで座っているのが見えた。健太は午前中部活だけれど、終わってからソッコー行くよ、と言っていた。いっしょに来てよお願い、と健太以外のサッカー部員にもチケットを売りつけたからたぶんみんなで連れ立って来るはずだ。一枚五百円のチケットを、高校生の少ないお小遣いから購入してもらうのは少々気が引けたのだけれど、こちらも全部自腹で払えるほど裕福ではないので許していただいた。

「友森くん、来てるね」

えらの張った顎に顔の皮膚を両端から引いたように細く吊り上がった目。お世辞にもかっこいいとは言いがたい男のコが、前から三列目の真ん中あたりに座っている。ミカりんはどうやらメンクイじゃないらしい。

「あー、ほんとだー、がんばって演奏しなくちゃー」

背中側からやけに可愛い、しかも相当芝居がかった声が聞こえてきて、遥奈とふたり肩を竦めた。いっしょに下校したあの日からふたりはめでたくつき合うことになったようだ。毎

日ではないけれど、何度かいっしょに下校したり、土曜日の部活後にはデートらしきこともした、とミカりん本人から報告が上がっている。

カレシといっしょにいるミカりんをうらやましいなと思う一方で、同じように自分もカレシがほしいかという、それほどでもなかったりする。特別好きな人がいれば話は別なのかもしれないけれど、そんな人は今のところいない。女のコ同士でいるほうが断然気楽だと、そう思う。「深沢君とはどうなのよ?」と、ミカりんや他の部員にとときき訊かれたりするけれど、それも何だかぴんとこない話だった。健太はわたしにとって、女友達以上に気楽に接することのできる幼なじみだ。健太への思いは恋愛とは僅かにズレた位置にある、とわたしは思っている。友情とも違う。寧ろ家族愛に近いような。たとえば僅かなズレをほんのちよつと突いてみたらどうなるだろうと、想像したこともあるにはあった。水色の、チョコレートの抜け殻らしき包みを目にした、あの夜のことだ。

うちの学校の制服を着た数人の男子が上手側の階段を塊になって降りてくるのが見えた。みんな、肩から大きなエナメルのスポーツバッグを提げている。健太だ。健太と、仲の良いサッカー部の男子が数人。そして、セーラー服姿の女子がひとり。ああ、あのコ、とわたしは目を瞬く。あれは同じ一年生で、サッカー部のマネージャーをしている海野さんだ。

こつこつと、ヒールが床を踏む音が聞こえた。袖幕の傍を離れ、後ろを向くと、黒い細身のパンツスーツに身を包んだ水嶋先生の姿が見えた。百七十センチ近くある長身瘦身にパンツはよく映える。

開演五分前のベルが鳴った。

「先生、かっこいい」

ミカりんがうっとりとした声で言うと、水嶋先生の能面がうすく剥がれた。唇の端を上げ、くすつと笑う。

「みんなも可愛いわよ」

「可愛いって。俺らいつもの制服じゃん。な?」
と小金丸。

「特に、林」

水嶋先生に名指しされた那津が、

「あ?」

と小さく声を出し、みんなもそちらへ注目した。水嶋先生は自分の胸元あたりに指で触れ言った。

「ボタン。今日はきちんと留めてるのね」

那津がうつと息を詰まらせ、目を丸くした。

「えらい」

水嶋先生の子供のような褒め方と、

「えらいって、何だよ……」

バツが悪そうに口ごもる那津に、みんなで笑いを囁み殺した。

「水嶋先生」

声をかけてきた放送部員に、お願いします、と水嶋先生は頭を下げた。厳かなベルの音がホール全体を包み込む。

「本日は修南高等学校吹奏楽部定期演奏会にご来場いただきありがとうございます——」
舞台上立つと、すぐに客席を見回した。

先ほど探しておいた両親の顔に視線を向ける。それから健太と、健太の友達と。馴れ親しんだ顔を見るといくらか緊張が和らぐので、ステージに立ったときはまず客席に目を向けるようにしている。客席の中央あたりに、今月の初め卒業していった先輩達が集団で座っているのが見えた。ああ、来てくれたんだ、そう思うとじわりと胸が熱くなった。大学が決まり引越しの準備があるから来られるかどうかかわからないと言っていたのに。先輩達が引退したあと、こんなにも人数が減ってしまった吹奏楽部を目の当たりにして、今どう感じているだろう。不甲斐ないような申し訳ないような気持ちが入り込んでくる。と、同時に、それでもきちんと練習をつづけてきたわたし達の演奏を聴いてほしいと心から思った。

椅子に座りフルートを唇に当てた。土屋副部長のクラリネットがBの音を奏で、それを追いかけるようにステージ上を音の渦が広がっていく。やがて一切の音という音が無になる瞬間がやってくる。頭上から落ちるライトの熱。客席の入り口近くで光る非常口の緑の灯り。吹奏楽部員の全神経が、水嶋先生の胸の前で待機する白い指揮棒、その一点にのみ集中する。ほんのわずかな動きも見逃すまいと。じっと見つめる。

白い指揮棒が、すっと空を切りしなやかに動き始めた。

楽器を載せたトラックがゆるやかな勾配を上がっていき、敷地を縁取る植え込みの向こう側へ消えて行くのを、みんな黙って見送った。

「あー。またあれをすぐに下ろさないといけないと思うと、やんなるね」

ミカリンが脱力した背中を猫のように丸め、言った。

「ほんとだね」

演奏が終わってもまだ片づけが残っている。吹奏楽は文化部でありながら運動部と同じくらい体力があるとよく言われるけれど、一番大変なのは演奏そのものよりも楽器の搬出入なんじゃないかとも思う。こういった演奏会でも、コンクールでも。

「ねえ、あのおじさん、どこかで見たことない？」

遥奈の視線の先を一齐に見やった。トラックが停まっていた場所で、いつまでも話し込んでいるふたり。水嶋先生と、五十代半ばくらいに見える紳士然とした男の人。男の人は仕立ての良いいかにも高級そうなスーツに身を包み、きちんと櫛の目のおった白髪を七三に分けている。上品な印象の、音楽関係者に割りと多いタイプだ。遥奈の言うとおり、どこかで見たことのある人だとわたしも思った。それも吹奏楽関連で。ただ、どこで見たのかは思い出せない。

「どこかのガッコーの先生じゃん？」

幸田さんが関心無さそうな口調で言った。

「水嶋先生って、地元、こっちじゃないんでしょ？ 関東だって聞いたけど。どういう知り合いないんだろね」

「関東？」

初耳だった。わたしは目を丸くして聞き直した。

「水嶋先生って、関東の人なの？」

「違うでしょー。関東の人がどうしてこんな田舎いなかの、しかも県立の教師になんかなるのよ」

「修南高校吹奏楽部強化の為？」

「有り得ねー」

小金丸の言葉にみんなが笑った。わたしも。私立の学校ならともかく、県の職員には異動がある。うちの学校の吹奏楽部の為だけにわざわざ教師になるという可能性は確かかない。

「そういや、俺、さっき、あのオヤジに話しかけられたんだよね」

「何て？」

「いやー、素晴らしい演奏でしたねーって。夏が楽しみですねーとか言ってた。夏って、コンクールのことかいな、って思ったんだけど。一応愛想良くそうですねーって返しといた」

「それだけ？」

「そんだけ」

「そんなん、社交辞令だよ」

「だけど、今日の演奏よかったなって。それはあたしも思ったよ？」

つい口を挟んでいた。音がひとつにまとまって特別きれいに響いていると、今日は何度もステージの上で感じる事ができたのだ。少人数だったことが却かえって良かったのかもしれない。ひとりで受け持たなければいけないパートが多く、その分、常に周りとの調和に耳を傾けることができたから。

演奏とは関係ないけれど、一部と二部の間に行った余興よきようも、なかなか好評だった。楽器の音当てクイズ（どの楽器が音を鳴らしているのかを当てる。吹奏楽経験者は基本的に参加できない）や、イントロクイズ（こちらは吹奏楽経験者も参加できた）を行った。ぎりぎりまで誰からもなんら良い案が出ず、結局柏木部長がひとりでアイデアを出し、司会までこなしたのだ。た。

楽屋がくやに戻り、鞆かばんとフルートケースを手を取った。長テーブルを挟んだ向かい側から大きな手が伸びてきてわたしの目の前の鞆かばんを取り上げる。前ボタンを全部外した学ランに、白いシャツの下には黒いTシャツを着ているらしく、派手なアルファベットの文字が透けて見えた。

「おじさん、来てたね」

何か声をかけたかった。だから口にしたのだけれど、言ってからこの話題はまずかったかな、と後悔した。ちらりと目線だけを上げる。那津はこちらの目を見据えたあと、顎あごだけで二回、どうでもいい感じにうなずいた。

林のおじさんが、いつから会場にいたのかはわからなかった。もしかしたら最初からいたのかもしれない。あ、おじさんも来てたんだ、と気づいたのは、二部が始まったあとのことだっ

た。客席の一番後ろの席に、わたしや健太の母親よりずっと歳若い女の人と並んで座っていた。那津の新しいお母さん。中学二年生の春、おじさんが再婚してすぐの頃、うっかり口を滑らせたわたしを那津は瞳の色だけで怒り、そのあと一週間も口を利いてくれなかった。どうして怒るの。無視され憤るわたしに、

「あの人はね、あや。那津にとってはお母さんじゃなくて、おじさんの新しい奥さん、それだけの存在なんだと思うよ」

そう言ったのは健太だった。

「那津はああ見えて、意外とナイーブなところがあるから」

驚いた。わたしの知っている那津は、負けん気が強く短気な所はあるけれど、どちらかと言えば大雑把で大胆な、悪く言えば無神経、良く言えばおおらかな性格の男のコでしかなかった。ナイーブだなんて。そんな風を感じたことはただの一度もなかったのだ。

まったくわたしは人を見る目がない、と思う。人を見る目がないから接し方を間違える。だから失敗するのだ。その短い絶交から数カ月後、別のことがきっかけで、那津とわたしは二年以上もの絶縁状態になってしまった。それだけじゃない。

——うざいよ。あんた、何様？

あのときもそうだった。わたしの図々しいまでの行動力と、破滅的な勘違いが原因で、わたしは別の女友達をもうしなかった。

「何？」

そんなつもりはなかったのだけれど、ずっと那津の顔を見上げていたらしい。怪訝な表情を浮かべる那津に、何でもないと首を横に振った。

楽屋の扉が開く。春日井さんと仲の良いチューバ吹きこしの古志野さんが、

「学校での片づけが終わったら、マックで打ち上げしようって、柏木部長が」
肉づきのよい頬を上げ、明るい声で報告した。

「やった」

小金丸が、そのからだつきには不似合いな瞬発力の良さでもって反応する。

「部長の奢りかな」

小金丸の図々しい発言に、

「そりゃないでしょ。自腹自腹」

わたしは答える。

「食べすぎんなよ、スモウベヤ」

ミカリンが肉の厚い肩を拳でぐりぐり押した。痛えよ、やめろ、と小金丸が顔を顰める。

「鍵閉めるよ。みんな忘れ物、ない？」

土屋副部長の声を背に通路へ出た。向かいの舞台袖へ通じる扉が中途半端に開いているのが目について、わたしは鞆を肩に掛け直し、重厚なつくりのドアノブに手を伸ばした。灯りの落ちた暗闇のなか、黒く光沢のあるものが微かに動いているのが見え、どきりとする。水嶋先生だ、と思った。水嶋先生がひとり、果てがどこにあるのかわからないほど高く真つ暗な天井を

立ち読みサンプル はここまで

見上げている。そのまま闇に溶けても不思議ではないほどの陰鬱いんうつさと、闇に打ち勝つ凛りんとした雄々おおしさと、その両方を纏まとったように見える背中。いったい何がそれほどわたしを怯おびえさせたのか、あとになってもよくわからない。先生を包む得体の知れない空気に、打たれたように動けなくなった。どれだけの時間、そこに立ち尽くしていただろう。わたしも。水嶋先生も。

「おい、何やってんだよ。もう、みんな行った——」

後ろから、那津の声が聞こえた。

わたしと那津に気づいた先生は振り返り、

「おつかれ」

穏やかな声で言うとすっと足を踏み出し、反対側に抜けるドアから姿を消した。

二〇〇九年 四月

三階の空き教室の窓から顔を覗のぞかせ、校門から体育館へとつづく前庭を見る。

去年、わたし達の入学式では青々と鮮やかな葉を繁らせていた桜の樹が、今年は寒さの影響もあつたのか、遅咲きの白い花びらを雪のように散らし新入生を迎えている。

「一年生、来たね」

春日井さんとふたり、母親と、或いは友人と連れ立って歩く真新しい制服の群れを見下ろした。修南高校の入学式は、毎年午後から行われる。

「あたしね。春休みに、花陽かよう中の吹奏楽部に顔、出してみたんだ。フーちゃんといっしょに」
フーちゃん、とはチューバ吹きの古志野こしの美美みみさんのことで、ふたりは花陽かよう中学の出身だった。
「そうなの？」

わたしは少し驚いて春日井さんの顔を見た。古志野さんは中学でもチューバを吹いていたけれど、春日井さんはまったくの初心者で、仲良しの古志野さんに誘われてこの高校の吹奏楽部に入ったと聞いている。「まさか、こんな大変な部だとは思わなくて誘ったの」と古志野さんのほうが言っているのを何度か耳にしたことがあった。だから、春日井さんは花陽かよう中の吹奏楽部に知り合いはいないはずだった。